

---

# 水汀の花

湖都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水汀の花

### 【Nコード】

N0021Z

### 【作者名】

湖都

### 【あらすじ】

異世界トリップした女子高生・遙は三人の王子の住む紅国に助けられる。

しかし間もなく、紅国は血で血を洗う戦期へと移行していく……。

（一応）恋愛ファンタジー目指してます 笑

## 序

“現れる場所”というものを、自分で選べたわけではなかったが、  
私 遥<sup>はるか</sup>はこの場に存在していることを激しく後悔していた。

「ひい　　やああああ　　！！！！」

この、金属を引っ掻くような甲高い悲鳴。  
両の耳を手のひらで押さえて、鼓膜を守った。

（こんな長い悲鳴聞いたの、初めて。てか、悲鳴上げられるのも初めて）

おそらく私と同じ女子高生で、悲鳴を上げられることのほうが稀  
だと思うけど。

声の主は、少年。

体格から見ても、多分私より年下。

唐突に現れた私を見て、驚いたのはわかるんだけど。

（ひっ……悲鳴あげたいのは、こっちなんだよね！）

目の前で悲鳴を上げている少年も、意味不明なんだけど。

鬱蒼とした緑の森。

少年と私がいるこの場所だけが、楢円に切り取られたように木がなかった。

楢円が自然に生まれたものではないことは、点々と残る切り株があることからわかった。

……私の学校は、どこ行った……？

それより明白な証が、少年が手綱を握る　　生き物。

「　　っ……」

耳をふさいでいても聞こえる荒々しい息が、頭にかかる。

ちら、と視線を上げるとそこに、爬虫類が巨大化したような体に翼が生えた生き物が、金色の目で私を見下ろしていた。

「ぎっ……ぎゃあああ！！　トカゲ！！　私、トカゲに喰い殺される！！」

耳をふさいだまま叫んだせいか、そのまま尻餅をついてしまった。ぎゅっと瞑った目をゆっくり開くと、巨大トカゲと私の前に白銀の刃が立ちはだかっていた。

「　　っひ……っ！？」

今度は刃物！？

切先は私に向けられて、木々の影に落ちかけた桃色の光が映りこんだ複雑な色をしていた。

「貴様は何者だ？　なぜここにいる？　虹砂にじすなに何をした」

柄を握っているのは、長い金の髪をした若い男だった。

金系の髪に、深い瑠璃の目。

藍色の服が、金に映える。

信じられないくらい、綺麗な人だ。

見惚れている場合じゃない。

慌てて腰を上げると、大して警戒もしていない表情で、でも少年虹砂をかばうように背後へ押しやって、切先を小さく揺らした。

私は両手を開いて、耳の横にひらひらさせて男に見せた。

か弱い女子高生相手に、丸腰であることを証明させるなんて、紳士的じゃないと思うけど。

「なっ、何も持っていないわよ……」

瑠璃の目をじっと睨みつけたのは、悔しかったから。突然現れて、こっちの事情も知らず、一方的すぎる。

「何も持っていないし、その子にも何もしてない。目の前にいるとわかった瞬間、その子が悲鳴を上げたのよ」

刃を突きつけられているにしては、饒舌に自分の言い分を言いきれたと思うけど。

目の前の男をもう一度見上げてみる。

金の髪に……瑠璃色の目。

（あっ！？ この人、日本人じゃないわよね。今の話、わかんなかった！？ あ、でも先に日本語で喋ってた気もする）

男はじつと私を見据えてから、優雅な動きで剣を鞘へと戻した。とりあえず、命の危機は脱した。

ほっとしていると、男は巨大トカゲの背に虹砂を跨らせて、水泳ゴーグルみたいなメガネをかけさせているのが見えた。

そのトカゲ、移動用なのか。

「ねえ！ あんたたち、ここに住んでるんだよね？ ここ、どこなの？」

男はちらつと私を一瞥して、自らもトカゲの背に跨ると、メガネをかけ、虹砂の手から手綱を受け取った。

「我らには今、貴様のような者に関わっている暇はない。どこへなりとも、去ね」

言っが早い、彼は手綱を操り、トカゲを宙へ浮かせた。  
噓。このトカゲ飛ぶんだ……。

ぼんやり目で追ってしまう、この世ならぬ光景。

状況から思えば、私はもっともっと焦って良いはずなのに。  
金の男と、虹砂という名の少年を載せた巨大トカゲは、見る見るうちに雲間へと姿を消した。

異世界トリップ、というやつだと思う。

（自分で分析できるんだから、私ってばずいぶん冷静だわ）

制服のスカートを汚さないように気をつけながら、森の中でとれたきのこに火を通している。

異世界トリップだろうが、タイムトリップだろうが、生きている限りおなか減るのだ。

放課後の音楽室。

声楽部内のオーディション。

私は春に開かれるオペラのヒロインの席を賭けて、他の女の子た

ちと戦っていた

はずだったのに。

気づけば森の楢円ハゲみたいな、木のない所に突っ立っていた。  
目の前には男の子と、巨大トカゲ。

ため息が出る。

あの少年が自分を見て悲鳴を上げていたのは、突然人がふって湧いたからだと思うけど。

私にしたら、あの子が手綱を持っていた巨大トカゲのほうがよく  
怖いって言うか……

(……トカゲは、この世界ではポピュラーな乗り物なのかしらね)

森を出るのは困難そうだった。

彼らが去った方向に集落でもあるのだろう。

たくさんの人に会えば、助けてくれそうな奇特な人にだって出会  
えるかもしれない。

ほら、日本語が通じるみたいだってこともわかったし。

そう思って、木々を分けて入ったのだが。

(木が多すぎて、自分がどこ歩いてんのかわかんなくなるのよね)

富士山の足元にある樹海では、感覚が狂って迷い子になってしま  
うという。

出口と自分の位置を見失った迷い子は、そのまま命を落としてし



まうのだ。

（　　！！！！　　こんなわけかんないところで、白骨化したくないーっ！！　　）

そんな話を思い出して背筋をゾツと凍らせて、もと来た道を戻って、橿円の広場に帰った。

天を仰ぐと、濃い藍色の夜空に銀の砂をこぼしたような星が散っているのが、円く切り取られたように見えた。

多分空のほうからも、ここは円い緑に見えるに違いない。

木々が多すぎて出口が見えないこの森の、思うにこの楕円は空からの出入り口なのだ。

つまり、例のトカゲが着陸するスペースに違いない。

（ってことは、また誰かがここにやってくる可能性があるってことよね！）

誰かが来たら、事情を説明して連れ出してもらおう。

今すぐ元の世界に帰れなさそうだけど、おなかは減るし、とにかく生きてなきゃいけない。

それにしても楯円の意味を理解するなんて、  
 冴えてるじゃないの。  
 あとは来た人に連れて行ってもらえば……

「……………」

私は、火の上で焦げないように、くるくる回していたきのこを刺した小枝を動かす手を止めた。

火がぱちぱちと小さな音を立てている。

（『連れ出してもらっ』ってことは、あの、でかトカゲに乗るってこと！？ トカゲに乗って、空を飛ぶ　！？）

非科学的すぎる！！

いや、そんなこと言ったら、異世界トリップしたい、非科学的すぎて喚きそうになるんだけど！

トカゲに話を戻そう。

去っていった彼らも随分と軽装だったし、鞍つばいものはセットしてあったけど、体を支えているのはあの手綱だけみたいに見えた。途中であのトカゲがくるっと回転したり、乗っているこつちがバランス崩したりした場合はどうなるわけ！？

（落ちっ…………）

普段、別に高所恐怖症ってわけじゃないけど。

それは『大丈夫』っていう信頼があるからなわけで。  
トカゲを信頼して空を飛ぶなんて、できないっ…………。

（ああ……万事休す……）

なんとなく良い匂いがしてきたきのくにふんふん鼻先を寄せて、食欲を満たすことで自分を慰めようとしていた時。

目の前に人が立っているのに気づいた。

「うわあっ!？」

なっ……………この世界の人たちって、夕方の金色のヤツといい、どうして音もなく唐突に現れるのか!？

濡れた土みたいな色をした短い髪をした、若い男だった。

二十歳そこそこに見える。

金色のに比べると、随分落ち着いた色合いの、要するに地味な雰囲気（きんいろのふくをきて）の服を着て。

私がびっくりして見開いた目を向けると、にこつと柔らかく笑った。

「良かった。まだいらして」

「『まだ』って……あなたは、多分初めて見る顔だと思うけど」

そうですねえ、と間延びした声で、私の手元から小枝に刺したきのこを抜き取った。

腰につけた袋から堅そうなパンを取り出すと、上にクリーム色の何かを切り取って乗せて、私の手にぱんと乗せてくれた。鼻を近づけると、チーズみたいな匂いがする。

「この小枝、火に近づけると毒素が空気に混ざるんで、口になさらないほうが良いですよ？ 空腹でいらっしやるのなら、パンをどうぞ、遠慮なさらずに」

毒っ……。

彼が足元の草むらにぱいと投げ捨てるのを眺めながら、ゾツとした。

もうちょつとで直接口につけるところだった。火にあぶっている最中だって、毒素は蒸発していたんじゃないかなるか。

とにかく生きてて良かった、などと思いながらパンにぱくついた。見た目どおり堅いけど、チーズの味は悪くない。空腹を満たすものとしては、きのこよりは良い。

ぱくぱくと噛み付いては咀嚼している私の前に、茶色の彼は外国のプロポーズする男みたいに、片膝について頭を下げた。

「紅国第二王子水風殿下と、第三王子虹砂殿下のお二人に、お嬢様をお連れするよう拝命しました。私の名は、若生と申します」

ごくつ、とパンの塊が喉を降りていった。

おうじ ？

夕方の二人連れが！？

って言うより、王子って……いや、イギリスとか存在する国もあるけど……

日本に生まれてこのかた、自分の人生の中に『王子』と会う日が来ようなどと、思ったこともなかった。

「お、おうじっ……金色の人、水風っていうんだ……へー王子……」

セリフの後半はどうでもいいつばやきだ。

若生はそれにすら、ハイと返して笑みを浮かべる。

残りのパンを飲み下すと、スカートをはたきながら立ち上がった。

若生は私よりちよつとテンポを遅らせて立ち上がる。

目が合うと、やっぱりにこつと笑ってくれる。

先の二人より、随分友好的だ。

私の狙いは、ある意味当たったようだった。

森の楢円ハゲは、トカゲの着陸地で。

次にやってくる誰かが、私を連れ出してくれる。

むしろ、若生という彼は私を迎えに来たのだというのだ。

これ以上の好展開はない。

(連れ出……)

若生を見ると、にこにこ笑っている。

私が行くか行かないか、返事をするのを待っているのだろう。

「あのー……その王子さま方の所に行く、交通手段っていうのは、やっぱり……」

「ご心配には及びません。飛竜で参っておりますから、すぐに到着いたしますよ」

ああ、やっぱり。

がつくりと肩を落とす私に、若生は水泳ゴーグルみたいなメガネを取り付けてくれて、バンドを調節してくれた。

風から目を守るものだ、と説明をくれて、手綱を握るための手袋もくれた。

私はその後、紺碧の夜空に絶叫をこぼしながら、森の楕円を後にすることができたのだった。

息も絶え絶えで到着したところが、どこだったのか。  
あまりに絶叫し続けたのと、辺りが真っ暗闇だったのとで、視界に景色らしい景色が映らなかったのだ。

「お嬢さま？　大丈夫ですか？」

「……っ…っ！！」

声も出ない。

真っ暗なトンネルの中を延々と引きずり回されたみたいで、吐きそう。

吐きそうなのに、顔が熱い。  
たいまつ  
松明のせいだ。

赤々と燃える松明が、均等な間隔で幾つも並んでいる。  
城壁の上にずらりと並んだ兵士たちが、人形のような無表情で藍色の空を見つめている。

そのうちの一人が、若生の手から手綱を受け取って、私たちが乗ってきたトカゲを操って行った。  
夜に吸いこまれるように小さくなっていく。

（ここの人たちって、みんな目が良いんだわ）

私には真っ暗にしか見えないのに。

城壁の向こう側から、色取り取りのドレスが近づいてくる。

松明に照らされたそれは、女官の群れだとわかった。

ひらひらと裾をひるがえす彼女たちが、武装した兵士たちが立ち並ぶ城壁にいるのは不似合いに見えたけど。

彼女らは若生と私を前に、ひたと足を止め、深々と頭を下げた。その動きは機械のように統制されていて、息づかいさえも揃っているようだった。

「ご苦労さまだったね、酒目<sup>さかめ</sup>。お嬢さまの迎え、ありがとう」

私の出迎えに来たのか。

驚いていると、女官群の一番前に立っている中年女性が「めっそうもございません」と返した。

彼女が『酒目』という名前で、若生に名前を呼ばれるということ、多分この女官群で一番偉いんだろう。

一見、白にも見える藤色のドレスは、暗がりの中に美しく浮いて見えた。

若生は「うん」と短く相づちを打ち、私に目を向けた。

「お嬢さま。彼女は酒目といって、大変信頼の置ける侍女です。ここにいらっしゃる間の生活は、酒目に一任しておりますから、何でも仰ってくださいね」



頷いて酒目をちらと見たが、目は合わなかった。

「水凧と虹砂には、いつ会うの」

その場にいる全員が、凍りついたような空気で私を見た。

そうか。

王子さまを呼び捨てにするなんて、もってのほかなんだ。

「え、えーと……水凧……さま？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0021z/>

---

水汀の花

2011年11月30日11時53分発行